

二枚貝資源復活プロジェクト

開内 洋・勢村 均

1. 研究の目的

中海におけるサルボウガイの産業化を検討するため、天然採苗技術により採苗した種苗を用いて放流試験および籠養殖試験を行った。また、アサリの冬場の減耗要因を調査するため被覆網による移植放流試験を行った。

2. 研究方法

サルボウ

(1) サルボウガイ籠養殖試験

平成24年7～12月、中海中央（水深約6m）の延縄施設において、前年採苗した種苗を用いて、垂下深度（2.5～4mまで50cm間隔）、種苗サイズ（大、中、小）、種苗由来（天然、人工）の各条件を変えた試験区を設けてサルボウの生残、成長等を比較し、養殖の可能性を検討した。9～11月に、中海全域11箇所、漁業者による養殖試験も実施した。

(2) サルボウガイ種苗放流試験

平成24年3,6,7月に平成23年度産の種苗206万個（平均殻長13～19mm）を本庄、北部しょう水路、下宇部尾、遅江沖、波入、江島沖2地点の計7地点に放流した。放流後4ヵ月後に桁曳き網漁具および採泥器により追跡調査を実施した。

(3) アサリ移植放流試験

平成24年2～4月にかけて、大海崎でアサリ稚貝（殻長約23mm）を用いて、蓋付エビ籠および網の目合（網なし、5mm、30mm）を替えた網被覆によるアサリの移植試験を行った。

3. 研究結果

(1) サルボウガイ籠養殖試験

生残率は、概ね90%以上の高い生残率で推移した。成長は、垂下水深別では4mで少し成長が悪くなる傾向にあったが、そのほかの試験区では順調に成長し、大サイズでは12月には平均約30mmとなった。また、中海漁協による試験でも11月末に取り上げて、全ての場所で

概ね90%以上の生残率と順調な成長を確認した。

サルボウガイの籠養殖は、水深を選べば、中海の全域での展開が可能で種苗放流に比べ成長が早いため、採苗した翌年12月頃には殻長が30mmとなることがわかった。

(2) サルボウガイ種苗放流試験

放流4ヶ月後の11月の調査で、特に効果が高かった場所は、遅江沖、本庄で生残率が96%で生貝も多く採取された。下宇部尾でも82%の生残率があった。江島沖では、生残率の高いものの、採取数が生貝、死殻共に少なく、今のところ効果が明確でない。北部しょう水路では、桁曳き船が入れないため、採泥器での調査を行った。生貝はわずか1個しか採取されず、斃死殻もほとんど採取されなかった。貧酸素により大量斃死した後に流されたものと推察された。これまでの結果から放流適地は、生残が比較的安定している遅江、江島沖と考えられ、本庄、下宇部尾では、夏季の貧酸素が生残率へ与える影響が大きい可能性もあり、しばらく経過観察をしていく。

遅江沖、本庄、下宇部尾では、今年の年末（放流17ヶ月後）には殻長30mm以上の漁獲が期待される。

(3) アサリ移植放流試験

蓋付エビ籠でのアサリの生残率は78%であった。網被覆試験では、網なし、30mmネットの生貝の回収率はそれぞれ3.4%、2.7%とほとんど回収されず、斃死殻もほとんどみられなかった。一方、5mmネットでは67%の生貝が回収された。

これらの結果から、冬場の減耗要因は、食害である可能性が高く、斃死殻がほとんど見られないことから、殻ごと食べる鳥類の可能性が高いと考えられた。また、5mm目合の網を被せることでアサリ稚貝の高い保護効果が得られた。